

11・25自決の日（1）

【三島由紀夫と若者たち】

これは、若松孝二監督による映画の題名で、先週（7月20日）までシアターキノで放映されていたものです。

この映画は、今から42年前の昭和45年（1970年）11月25日に、作家三島由紀夫氏が楯の会のメンバー4人と共に陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地を一時占拠すると共に、三島氏自らバルコニーで自衛隊員の決起を促す演説を行った後、総監室で割腹自殺するという衝撃的な事件を描いたもので、5月に行われたカンヌ映画祭でも上映され、現地で注目を集めています。

私はこれまで、不明にして若松監督の映画を見たことはありませんが、同監督はピンク映画『甘い罠』でデビュー、反体制の視点から描く手法は当時の若者たちから圧倒的に支持されたといわれています。最近では、2007年に制作した「実録・連合赤軍あさま山荘への軌跡」は2008年に行われたベルリン国際映画祭で最優秀アジア映画賞を受賞しています。こうした若松監督が、今度は、三島氏の起こした市ヶ谷駐屯地襲撃事件をどう描くのか興味がありました。

昭和45年当時というと、私は自治省（現総務省）で勤務していたのですが、丁度昼食を取るため食堂にいた時、突然「三島氏が市ヶ谷を占拠した」とのニュースが飛び込んで来て、とてつもなく大きな衝撃を受けたことを、今でも覚えています。しかも、割腹自殺したという事を知り、二重のショックを受けたものです。

ただ、ノーベル文学賞の候補とまで評価されていた高名な作家が、何故陸上自衛隊の市ヶ谷駐屯地を占拠し、割腹自殺するに至ったのかということは、当時から今も理解できていません。その意味で、今回の映画は、三島氏が楯の会を作り、やがて割腹自殺へと突き進んで行く軌跡を解き明かしてくれるのではないかと期待していました。

私がこの映画を見た日は、観客はそう多くはありませんでしたし、見に来た人は私と同じ世代の方が多かったように思います。20代、30代の若い方々に取っては、三島由紀夫という作家は知っていても、三島事件は遠い話で、余り興味は持たれなかったのかも知れません。一方、私と同年代の方は、私と同じような期待を持って劇場に足を運んだのではないかと思います。（続く）

（塾頭 吉田 洋一）